



1_大人に交じって子供たちも御神楽を熱演／2_一層の精進を誓う千葉仁一保存会長／3_出番に備え真剣な面持ちの会員／4_元門崎小校長の川崎町門崎の鈴木淳治さん(89)は「太鼓の音を聞くと、門崎小学校での活動を思い出し、感動します。地域に伝わる大事な芸能。これからも長く続いてほしい」と盛んに拍手／5_三番叟の準備をする千葉正浩さん、隆寛くん親子／6_地元で初めて太鼓を披露した千葉隆寛くん(右)と千葉孟くん



汗をぬぐった。話し、孟くんは「他の演目にも挑戦したい」と大粒の汗をぬぐった。

大東高3年の千葉隆寛くんは一関高専2年の千葉孟くんは、三番叟を演じ、「御神楽」の太鼓を初めてたたいた。隆寛くんは「見ていて人に感動を与えたい」と目を見守る中「三番叟」「岩戸開き」など、7演目を披露。熱を帯びた伝統の舞いに、会場からは大きな拍手が送られた。

新たな後継者と成果を披露する布佐神楽

川崎町門崎の布佐神楽保存会(千葉仁一会長)は、4月29日、同町門崎の川崎農村研修センターで発表会を開いた。

同保存会にとっては、練習の成果を発表する大切な場。次代に技術を伝える目的もある。

布佐神楽の歴史は長い。1863年(文久3年)に始まったとされる。2013年に150周年を迎え、同年4月に県の無形民俗文化財に指定されている。

当日は、地元の住民ら約200人が見守る中「三番叟」「岩戸開き」など、7演目を披露。熱を帯びた伝統の舞いに、会場からは大きな拍手が送られた。



「セシヤーハー。集まりたまえ、四方の神々、四方の神々、ヤーホー」神集歌とともに里山に太鼓と鉦の音が響く。

春。今年も神楽の季節がやってきた。「南部神楽」は岩手県南から宮城県北に伝わる郷土芸能。修験者が伝えた舞は、庶民によって受け継がれ、独特のスタイルが確立された。

色とりどりの衣装を着て踊る「舞い手」と、太鼓・鉦を演奏する「はやし方」が、息の合った演目を披露する。舞い手は、踊りながら歌うようにセリフを言うことも南部神楽の特徴だ。

南部神楽は、芸能にとどまらないさまざまな側面を持つ。各地の神社では例祭が開かれ、神楽が奉納される。地域では発表会が開かれ、世代を超えた交流を進めている。さらに技術の向上を目的にした大会も開かれている。

神をあがめるため、地域住民の交流のため、技を競うため。同じ舞でも、神楽衆(※1)の思いはさまざまだ。

人々に愛され続ける南部神楽の魅力がカメラが追った。

Pick Up 2 春の日差しを受け、 里山に響く太鼓の音 南部神楽の春



市内弥栄の富沢神楽の熱演

技の真骨頂を競いあう 第45回岩手県南宮城県北神楽大会

第45回岩手県南宮城県北神楽大会(同実行委主催)は5月3日、巖美中体育館で開かれた。同大会は南部神楽の技術の向上などを目的に開かれている。

今年は、市内から5団体、岩手県内から2団体、宮城県から5団体の計12団体が出場。各団体は、源平台戦や神話に基づく物語などを披露し、日頃の

練習で鍛えた技を競った。このうち、奥州市衣川区の大森神楽保存会は岩戸開きを披露。鉦をたたいた佐々木勇磨くん(衣川小6年)は「初めての大会なので緊張した。太鼓のリズムに合わせてうまくできた。踊りも楽しいので、これからも続けて、うまくなりたい」と満足した表情を見せた。



約350人の観客が演技に見入った



「バチ車」と呼ばれる太鼓演奏



1_地区を回る保存会／2_みこしの前で鶏舞を奉納／3_持ち寄ったごちそうを囲む。自然と笑みがこぼれる／4_小岩恭一代表

家内安全、五穀豊穡を願う
達古袋神楽

達古袋地区の八幡神社例大祭は5月3日に開かれ、達古袋の神楽衆が各集落で神楽を奉納した。

達古袋の八幡に鎮座する八幡神社。地区内の安全や豊作を願うため、春と秋に例大祭が行われている。中でも「ご巡行」は、春にだけ行われる特別な行事。神楽衆は、7つの集落を

みこしと共に周り、各地の公民館や鳥居の前で鶏舞などを舞う。各集落では、持ち寄りのごちそうが振る舞われ、今年一年の安全と豊作を願う。

達古袋神楽保存会の小岩恭一会長は「家内安全と五穀豊穡。いろいろな願いを込めて、舞いました」と爽やかな笑顔を見せ、「例大祭は、地域で長年続けられてきた行事。これからも大切にしたい」と力を込めた。

※1…神楽衆は神楽に関わる人たちの呼称の一つ。神楽連中と呼ぶこともある。